

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究◎

研究期間：2007～2008

課題番号：19520045

研究課題名（和文） 術数書の基礎的文献学的研究

研究課題名（英文） A Basic and Philological Study of Shu-shu (術数)
books and documents

研究代表者

三浦 國雄 (MIURA KUNIO)

大東文化大学・文学部・教授

研究者番号：60027555

研究成果の概要：本研究は、術数学の基礎研究として主要術数書の文献解題を行なうものである。すでに平成 17・18 年度の第一期研究において研究報告『主要術数文献解題』を刊行したが、本研究はそれを承ける第二期研究であり、第一期で取り上げることが出来なかった文献（出土術数文献も含む）の解題を試み、すでに本年 3 月、『主要術数文献解題 続編』として刊行済みである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：占術

1. 研究開始当初の背景

術数学は、中国思想、さらには東アジア文化の基礎学のひとつに位置づけられるべきなのに、本邦においては従来、思想史学と科学技術史の狭間に置かれてなおざりにされてきた。その一因はおそらく、「数」と「占」とが分かちがたく結びついているその構造に求められるだろう。「数」は科学的・合理的だが「占」は非科学的だとする予断が研究者を躊躇わせていた（いる）のであろう。通書が良い例である。暦法や暦書の研究については科学史家による重厚な研究の蓄積があるのに対して、通書研究は本邦に何の蓄積もなく、海外の研究に大きく水を開けられてい

る。風水研究も同様で、ほとんど文化人類学の独走の観があるのはいいとしても、基本的な歴史文献の編年や内容の解明が著しく立ち遅れていて、風水の文献研究をやっている人は、本研究の分担者・宮崎順子を含めて三指に満たない。易占（易哲学ではない）や呪符についても事情は変わらない。分担者の山里純一（沖縄学、呪符研究）、宮崎順子、それに研究協力者の益子勝（易占）は、それぞれの分野で着実な研究を積み重ねてきている。かくして第一期研究（平成 17～18 年度）が開始されたが、その期間中に扱えなかった文献が数多く出て来たので第二期研究（本研究）を申請したのであった。

2. 研究の目的

「術数学」なるものは、わが国の中国学界ではまだ認知されているとは云いがたく、研究が立ち遅れているので、まず基礎研究として多彩な文献の正確な解題の提供を目指した。

「術数学」は、つとに『漢書』芸文志において学問の一分野（術数略）として確立されているにもかかわらず、近・現代の中国学において研究者から冷淡な扱いを受けてきた。そういう状況下、木村英一氏はいち早くその重要性に注意を喚起されたが、その後、研究に大きな進展が見られたとは云いがたい。近年、川原秀城氏や武田時昌氏、そして辛賢氏らによって漸く研究が本格化し始めたという状況である。

しかしながら、我々の研究スタンスは、上述した「経」と表裏一体をなすとする木村英一氏、それに川原氏らのスタンスとは微妙に相違している。たとえば、ここに一機の飛行機があるとして、胴体は天文、暦、地理、易、医、などと多様であるが、共通して左翼は占術・呪術（神秘主義）、右翼は数理学（合理主義）になっていて、これら三者が渾然一体となって飛行しているのが術数なのである。易で言えば、易占（左翼）と易数（右翼）という関係である。ところが、現今本邦の術数研究は川原氏にせよ武田氏にせよ、科学史からのアプローチのゆえであろうか、どちらかと云えば数理的側面が重視され、占術的側面が軽視されている嫌いがある。木村氏の術数論はきわめて革新的のものであったが、我々からすれば、宋代以降の民衆化・通俗化した術数は視野の外に置かれている。我々はむしろ通俗化した「左翼」を重視する。

木村氏が念頭に置いておられたのは、易を中心とした漢代の術数であった。これが「経学と並ぶ程の重要性をも」っていたのはおそらく木村氏の云われる通りであろう。思うに宋代前後のものによってはもっと早くからこうした術数世界に変化が生じる。要するに術数の社会的拡散・通俗化・民衆化である。『四庫全書』の編纂官たちが術数の交通整理を行ない、その格上げと格下げをせざるを得なかったのは、こうした背景があったからに違いない（『四庫全書総目提要』子部、天文算法類・術数類）。

我々が本研究で取り上げる術数書の大部分は、実はその格下げされた方に関わっている。ここで『四庫全書総目提要』術数類の細目（ジャンル）を抜き出しておこう。この分類は、各地の漢籍所蔵機関における漢籍分類法のモデルとなった、京都大学人文科学研究所の『漢籍分類目録』にそのまま踏襲されている。

数学（シンボリックな象数）

占候（科学的な気象観測ではなく雲気占など）

相宅・相墓（風水）

命書・相書（四柱推命と人相・手相）

陰陽五行（陰陽五行に仮託した占い）

雑技術（夢占や文字占など）

我々の願望としては、以上のジャンルのすべてに関わる術数書を取り上げたかったのであるが、第一期・第二期を通じて種々の制約によって の三つのジャンルしか扱えなかった。本第二期研究においては、そのジャンルを充実させる一方で、あらたに研究協力者に大野裕司氏を加え、出土術数書を取り上げて術数文献の源流を探った。

3. 研究の方法

「研究課題名」が示しているように、本研究は術数の基礎文献の解題を目指しているため、能う限り所蔵機関に足を運び、現物を手に取ってその書誌情報を正確に把握することが基本的な方法である。

具体的に述べると、初年度である平成 19 年度には東京で一回研究会を持ち、それぞれ研究計画を持ち寄って意見交換を行なった。当該年度の最大の活動および収穫は、メンバー（三浦・山里・宮崎）によるベトナム漢籍調査であった。日程は平成 19(2007)年 9 月 9 日から 17 日まで、主たる訪問先はハノム研究所（ハノイ）で、それぞれの専門に応じた調査を行なった。三浦は暦書・通書の調査でベトナム刊の『玉匣記』を見出し、また通行の『玉匣記』とは系統の異なる『新刊玉匣記纂要』なる版本を調べたほか、ベトナム刊の『万事不求人』、ベトナム暦書『大南成泰十三年協紀曆』を調査し、またベトナム道教について『真武妙経』を調べる一方、ハノイの荘重な鎮武観（真武神を祀る道教寺院）も参観して知見を深めた。山里は、中国文化の影響を深く受けた同じ小国という観点から沖縄の術数書との全般的な比較を行なった。宮崎はベトナム固有の風水書を閲覧・調査し、多数の資料を持ち帰った。唐の高駢に仮託される風水書が多いことは三浦も気づいた事実である。ベトナム行の成果は成果報告書（平成 21 年 3 月刊）で一部生かされている。

る。今回生かせなかったものは、数年先に構想している術数文献解題総合版（タイトル未定）において発表したいと考えている。また、メンバーは国内の漢籍所蔵機関にも足を運び、報告書作成に備えた。たとえば三浦は、愛知の西尾市立図書館、東京都立中央図書館、尊経閣、内閣文庫等で術数書の調査と収集を行なった。協力者の益子は、引き続き易占書を研究し、中国の易占書にも研究を展開させつつあり、また、真福寺本・大須文庫本と呼ばれる国宝級の蔵書を誇る名古屋の真福寺に赴いて調査を行なった。また、同じ協力者の大野は、北京の精華大学において出土術数書の研究を続行した。なお、全体会議は、4月に東京で一度しか開けなかったが、メールを活用し、北京の大野も含めて絶えず情報交換を行なった。

最終年度である平成20年には、各地に散らばっているメンバー同士の意見交換も兼ねて海外調査を計画した。ヨーロッパは案外「穴場」なのではないか、それもパリ・ロンドンのような文化的中心よりも辺境の方が術数という一種の「辺縁文化」を豊富に保存しているのではないか、という意見が出された。スペインについては井上泰山氏によって調査がなされ、このほど大著にまとめられた（『漢籍西遊記』関西大学出版部、2008年）。そこには確かに術数書はなくはないが、しかし個々のメンバーの関心に応えてくれるほど多彩ではない。ベルリンについても少し調べたが（国立図書館）、術数以前に漢籍の所蔵自体が全般的に貧弱な印象を受け、航空運賃の高騰もあって結局欧州行は断念し、個々人の調査行に委ねることにした。

三浦は8月に韓国ソウルに赴き、東国大学図書館、国立中央図書館（ソウル市瑞草）で調査を行なった（奎章閣は燻蒸のため閲覧できず）。東国大学では表紙に「玉匣経選択要集」と墨書された『玉匣記』を見つけた（『玉匣記』が「経」になっている）。また、9月には石垣に飛び、石垣市立図書館で調査を行なう一方、山里純一氏とともに八重山の風水巡検記『北木山風水記』の訳注作りに参加した（本書は21年1月

『石垣市史叢書 16』として石垣市から公刊された）。

山里は石垣へ4回、久米島に1回赴いた。石垣では市史編纂室で『八重山黒島占書・宝閣』というタイトルが附せられた日撰書などを調べ、八重山博物館で与那国の西銘家文書を全般的に調査した。久米島では上江洲家文書『日撰書』の現物確認と写真撮影を行なった。

宮崎は、風水書を多く所蔵する東京大学東洋文化研究所で明代の風水書の調査・撮影を行なったほか、年末には台湾に出張し、故宮博物院文献所と国家図書館にて『黄帝周書秘奥』『玉髓秘経』などの元・明版の調査を行ない収穫を得た。

益子は19年度に引き続いて、名古屋の真福寺・大須文庫（『火珠林』ほか）、京都の建仁寺両足院、慶應義塾大学斯道文庫（『百衲襖』ほか）等で文献調査を行なった。益子はブログの「研究日誌」で研究活動を公開しているので詳細はそちらを参看願いたい。

大野は、引き続き清華大学で研究と資料収集に従事した。

以上の調査行のほか、本年度もメールを活用して絶えず情報交換を行なった。

4. 研究成果

第一期研究に引き続いて、本第二期研究においても『文献解題 続編』をまとめることができた。その研究過程においてメンバー各人には、それとは別に新しい発見も少なくなかった。以下にその『文献解題 続編』（総101頁）の目次を掲げておく。構成・体裁は第一期の成果報告書をそのまま襲う。

刊行に当たって（三浦國雄）

目次

解題書細目

第一部 総論

- 1, 出土術数書について 術数書の源流（大野裕司）
- 2, 易占書について（益子勝）
- 3, 風水書について（宮崎順子）
- 4, 沖縄の術数文献について（山里純一）

第二部 文献解題

- 1, 出土術数文献解題
- 2, 易占書解題(益子勝)
- 3, 風水書解題(宮崎順子)
- 4, 沖縄の術数文献解題(山里純一)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者は
下線)

[雑誌論文](計4件)

- 三浦國雄、「『酬世錦囊』の中の『朱子家礼』」、『東アジアの宗教と儀礼』、P.205-230、2008年、査読無
- 山里純一、「魔除け信仰」、『石垣市史』各論編・民俗下、P.145-178、2008年、査読無
- 宮崎順子、「陰宅風水 墓葬と子孫繁栄」、『人文学論集』25、P.199-216、2008年、査読無
- 大野裕司、「『周易』明夷卦初九爻辞の一解釈」、『周易』に見る鳥のシンボリズム」、『中国哲学』35、p.33-50、2007年、査読無

[学会発表](計3件)

- 三浦國雄、「道教の天 「初期天師道」における「天帝」を中心に」、『第53回国際東方学会会議 東京会議』、2008年5月24日、日本教育会館。
- 宮崎順子、「伝郭璞『葬書』の成立と変容」、『風水シンポジウム』、2008年11月13日、明治大学
- 大野裕司「阜陽漢簡『周易』的“筮辞”与“卜辞”」、『国際易学連合会第2次会員大会』、2008年11月7日、北京西山賓館

[図書](計1件)

- 三浦國雄『増訂 易経』、東洋書院、総445頁、2008年

6. 研究組織

(1)研究代表者

三浦國雄(MIURA KUNIO)
大東文化大学・文学部・教授
研究者番号：60027555

(2)研究分担者

山里純一(YAMAZATO JYUNITI)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：50166659

宮崎順子(MIYAZAKI YORIKO)
帝塚山学院大学・人間文化学部・講師
研究者番号：50460944

(3)連携研究者

益子 勝(MASUKO MASARU)
暁星学園・教諭

大野裕司(OONO HIROSI)
北海道大学・大学院・文学研究科・博士
後期課程